日本記者クラブ会報

第196号
1986年
6月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F　〒100
© 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三―二七二一（代）

会員資格審査をより厳重に

―クラブ機能は拡充強化へ―

現行会員制度ができてから十年、このビルに移ってきてからも十年――三月から続行中の「メンバー」と「ハウス」両面からの基本路線見直し作業も終わり、新方針が五月二十六日の総務委員会の検討を経て、理事会で可決、総会で承認された。

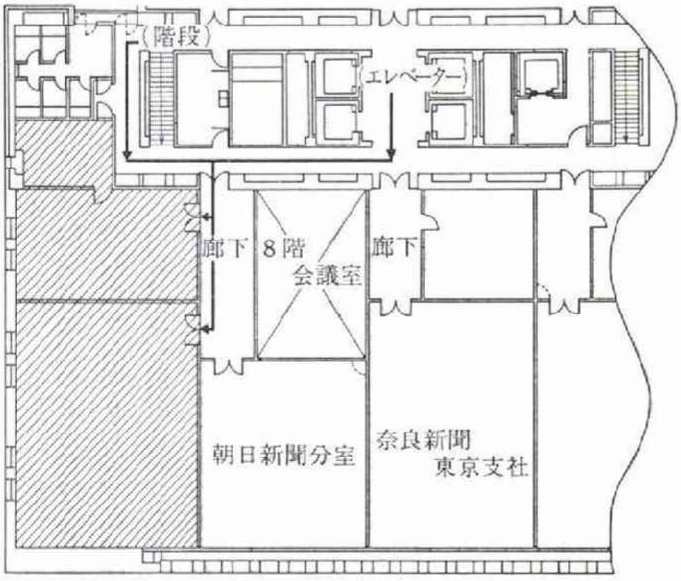
まず会員資格委員会（渡辺恒雄委員長）は、入会審査のための内規を改めた。ウエーティング方式を導入しての〝総量規制を〟との意見もあったが、新内規で審査を厳重にとの抑制策を選んだ。また推薦権を持つ基本会員に対し、安易な推薦を慎むよう徹底することをも決めた。

渡辺恒雄会員資格委員長の話　会員数が、施設の収容能力をオーバーしてきたこと、招待する内外のVIPの警備上の問題等から今後入会審査を慎重にしたいので、入会推薦にあたって、推薦者に十分責任を持っていただくよう要望する。

六十坪のスペース増

ついで施設運営委員会（原寿雄委員長）はクラブ機能拡充強化のため、八階に約八十坪のスペース（下図斜線部分）を借り増しし、昨夏から使っていた会議室（二十坪）を返却することを決めた。差し引き六十坪の増となる。

このスペース増を同委員会は、これまで機能的に問題とされていたことの是正を主眼に、八、九階を通じての模様変えを検討している。まず第一に本来の目的にかなうよう記者会見室を拡張。そのため、後方の家具庫部分を大幅に縮小する。第二は、いまの事務局を配ぜん用スペースに改造。もともと設計にこの種の配慮が欠けていて、廊下や通路がそのために使われ、消防や衛生的見地から問題とされていた。そのほか事務局のOA化と八階への移転、原稿執筆用のブースの増設など、アイデアも論議も百出だが、最終決定は七月なかばの予定。八月中に内装と移転を終え、新発足は九月からとなる。この夏もまた忙がしくなりそうだ。



日比谷公園側

記念講演に一四〇人が出席

二十六日の総会はこのほか、六十年度事業報告、収支決算を承認し、六十一年度クラブ賞の受賞者岡村和夫会員を表彰した。その後、十階のホールで、井上ひさし氏の記念講演会が行われ、家族やゲストを同伴した会員一四〇人が出席した。引き続き会員懇親会が宴会場で行われ、岡村氏のクラブ賞受賞を祝った。

受賞のことば

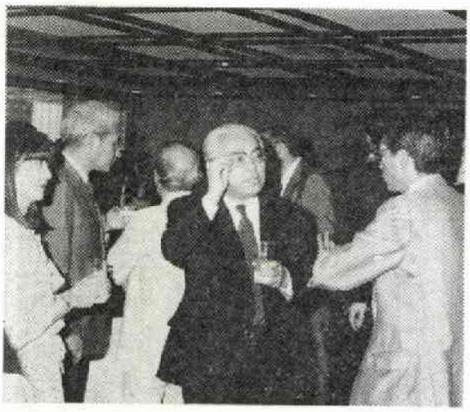
記者として燃え尽きたい

岡村和夫
（日本放送協会　解説委員長）

権威ある日本記者クラブ賞を受賞し感激している。

自慢になる話ではないが、私はこれまで賞と名のつくものにあまり縁がなかった。

小学校の優等賞とか、NHKの勤続表彰を別にするとこれまで頂戴したのは、小学校一年の時、埼玉県の書道展覧会で金賞をもらったのと、小学校六年の時、剣道大会で中学生を含め七人抜きをやり、表彰されたぐらいのものだ。



会員懇親会で（5・26　宴会場）

これとても疑い深いNHKの同僚たちは、歴代解説委員長から放送の時はもちろん、人さまの前ではいっさい字を書くなと事実上の業務命令を受けていた悪筆のお前が、あるいは、およそスポーツとは無縁の生物のお前が、と誰も信用してくれない。

そういう次第で今回の受賞は、わが生涯における空前絶後のことである。

受賞の理由は、私が十七年間にわたってNHKの国会討論会の司会をしてきたことなどによるもの、とうかがっている。

国会討論会は、終戦後間もないラジオ時代からの歴史の長い番組だが、三十年代後半から四十年代はじめにかけて主に司会されたのは、政治評論家の唐島基智三氏だった。

その唐島氏が、ある日心臓発作で倒れ、とりあえずピンチヒッターに起用されたのが、私と国会討論会のなれ初めで、当時はこんなに長くつきあうとは夢にも思わず、正確にいつからかは覚えていない。

国会討論会の最大の難所は、多忙な日程と複雑な都合が交錯する各党や政府の代表にNHKまでお越しいただくまでだが、司会者にもいくつかの苦心はある。

その第一は、各党・政府の主張、論点を国民の前によくかみ合う形で明確に引き出すこと。

第二に、政治家の建前でなく本音を語らせること。

第三は、不偏不党、公正に運営すること。しかし野党多党化の政治状況の中で、発言の回数、時間の割り当てと討論の活性化の兼ね合いが、何年やっても難しい。

こんなことなどを心がけてはいるが、各党を代表して討論会に出るベテラン政治家のガードは固く、きょうこそ出席者全員が率直に本音をさらけ出して語ってくれたと、満足を味わったことは残念ながらまだない。

国会討論会のことだけふれたが、この機会をお借りして、私の同僚であるNHKの解説委員たちが毎日テレビ三本、ラジオ二本の定時解説番組のほか、報道局の一員として、ニュースや各種番組で活躍していることを申しあげておきたい。

NHK職員としての終着駅は遠くないが、今回の受賞をはげみとして古エンジンに再点火し、最近どなたかも口にしているように、ジャーナリストとして心も身体も燃焼しつくしたい。

最後になったが、国会討論会に目をかけ、ご推薦、ご決定いただいた推薦委員会、選考委員会、理事会の皆さま、十七年にわたり不肖の私に司会を任せてくれたNHKの関係者、番組を支えてくれた歴代のスタッフの方々に、心からの感謝を申しあげて受賞の弁としたい。

おかむら　かずお氏略歴　昭和五年埼玉県出身。早稲田大学第一商学部卒。二十六年NHK入局。警視庁記者クラブ、労働省クラブ、大阪中央放送局、報道局政経部などを経て、四十一年解説委員として政治・政局問題、安保・防衛問題、原子力問題などを担当。五十九年から解説委員長。

第28回通常総会

（昭和61年5月26日（月）日本記者クラブ記者会見室）

社団法人日本記者クラブ第二十八回通常総会は、出席法人会員二八社、委任法人会員一〇六社、計一三四社の出席をもって成立（定足数七四社）、定款第23条1項により新井明理事長が議長となり、午後三時三十分、クラブ記者会見室で開催された。

昭和六十年度事業報告（五月号既報）ならびに、同収支決算（別表参照）、剰余金処分を理事会原案どおり承認した。この結果、一五、六九九、五八三円の剰余金は、六十一年度予算の収入の部に繰り越し、同支出の部の予備費に追加計上されることになった。

議事終了後、本年度日本記者クラブ賞の贈賞式が行われ、新井理事長から岡村和夫会員（日本放送協会解説委員長）に表彰状、副賞（五十万円）、記念品（万年筆）が贈られた。

続いて、午後四時三十分からは作家の井上ひさし氏を迎え、「新聞文章・放送ことば・日本語」の演題で記念講演が行われ、五時三十分から会員懇親会に移った。

昭和60年度収支予算対比

自昭和60年4月1日
至昭和61年3月31日
△印減少

科目	予算額	実算額	対比
〈収入の部〉	円	円	円
前年度繰越金	12,555,598	12,555,598	0
プレス会員会費	173,328,000	175,051,950	1,723,950
法人会員会費	115,200,000	115,350,000	150,000
個人A会員会費	24,876,000	24,469,200	△ 406,800
〃 B 〃	1,740,000	2,042,500	302,500
〃 C 〃	10,752,000	10,878,750	126,750
〃 D 〃	20,760,000	22,311,500	1,551,500
賛助会員会費	40,608,000	43,797,500	3,189,500
法人賛助会員会費	31,044,000	34,012,500	2,968,500
個人 〃 〃	4,020,000	4,335,000	315,000
特別 〃 〃	5,544,000	5,450,000	△ 94,000
クラブ利用費収入	1,632,000	645,060	△ 986,940
貸室料	17,400,000	24,816,500	7,416,500
雑収入	17,400,000	19,796,125	2,396,125
特別収入	6,000,000	10,144,971	4,144,971
施設機器賃貸料	1,800,000	1,748,500	△ 51,500
受取利息・その他	9,600,000	7,902,654	△1,697,346
計	262,923,598	276,662,733	13,739,135
〈支出の部〉			
事業費	154,632,000	152,965,438	1,666,562
借室維持費	126,132,000	126,561,983	△ 429,983
借室料	97,176,000	97,175,872	128
共益費	16,404,000	16,398,432	5,568
空調・光熱・水	12,552,000	12,987,679	△ 435,679
会議費	2,040,000	1,818,787	221,213
事業運営費	11,040,000	9,610,447	1,429,553
会報発行費	9,240,000	9,381,575	△ 141,575
運営雑費	1,080,000	1,053,709	26,291
通信費	2,040,000	1,762,097	277,903
印刷費	2,520,000	2,329,560	190,440
交通費	540,000	447,280	92,720
管理費	14,040,000	13,314,509	725,491
クラブ管理費	9,000,000	8,863,773	136,227
機器備品費	1,200,000	735,450	464,550
消耗品費	1,560,000	1,434,799	125,201
事務委託費	1,560,000	1,560,000	0
事務雑費	720,000	720,487	△ 487
人件費	67,980,000	71,392,398	△3,412,398
給与金	39,432,000	42,229,800	△2,797,800
賞与・諸手当	27,468,000	28,349,354	△ 881,354
厚生費	1,080,000	813,244	266,756
諸積立金	8,960,000	8,960,000	0
資産準備積立金	8,000,000	8,000,000	0
退職準備積立金	960,000	960,000	0
予備費	17,311,598	14,330,805	2,980,793
計	262,923,598	260,963,150	1,960,448
収支差	0	15,699,583	15,699,583

財産目録

昭和61年3月31日現在

資産の部 科目	金額	負債の部 科目	金額
	円		円
繰越剰余金の部			
現金・預金	9,257,347	仮受金	2,000
仮払金	200,000	預り退職準備積立金	21,810,678
立替金	16,390,190	預りクラブ賞積立金	23,794,587
未収会費	5,572,550	預り資産準備積立金	116,462,130
退職準備積立預金	21,810,678	預り特別積立金	75,940,399
クラブ賞積立預金	23,794,587		
資産準備積立預金	116,462,130	繰越剰余金現在高	31,418,087
特別積立預金	75,940,399	（内当期剰余	15,699,583）
小計	269,427,881	小計	269,427,881
繰越通常財産の部）			
保証金	140,833,000		
敷金	20,426,512		
内装	20,087,018		
什器	19,860,752	繰越通常財産現在高	201,207,282
小計	201,207,282	小計	201,207,282

期末正味財産現在高　232,625,369円

とっておきの話

覚悟をもつ「道化」

鈴木博信

アフリカ、ベトナムで得た風土病がもとで宿痾を得、心ならずも記者生活を中断することになった私にとって、鮮明なのはやはりその当時の記憶である。

一九六四年九月十三日、日曜日の朝。私は中立主義者と目されていた南ベトナム軍の一将軍の前線視察に同行するため、サイゴン郊外のタンソンニュット空港にいたが、将軍も常連のアメリカ人記者の集団もいつまでたっても姿をみせない。グエン・カーン軍事政権の内部では、将軍たちに下剋上の動きが目立っていたときのことである。居あわせたNBCの記者と言葉を交わすうち、「さてはクーデターか」と思い至って市内にとって返したところ、要所はすでに戦車で固められ、電報・電話局も封鎖されたあとだった。

祈るような気持ちで街外れにある国際電話の送信所に回ったところ、奥の一室にあったアメリカ向けの回線だけは生きていた。ワシントン支局長の木村瑛一氏（現在NHKインターナショナル社長）が私の報告を聞きながら、同時に別の電話を使って要点を東京へロうつしにしてくれているうち、この回線も切られてしまった。

あとで聞くと、東京で電話をうけた緒方彰外信部長（現在外交評論家）はそのままスタジオに駆けこみ、すでにはじまっていたお昼のテレビニュースにとっさに「出演」して、このニュースをオン・エアしてくれたという。大先輩たちのチームワークのおかげで、辛うじて国際的特オチだけは免れたわけである。

このあと私たちは、アメリカ大使館の専用回線の使用を許されて送稿を続ける、アメリカ人記者たちの活躍ぶりを目のまえにしながら、丸一日近く報道管制を強いられる羽目になり、結果的には右の報告が日本人記者としては唯一のクーデター報道となった。

ブーブメリ氏との出会い

いかにも長たらしい前置きになって恐縮である。ベトナムから帰国後これまた延々と続くことになった療養生活中、ふとしたことからフランスのル・モンド紙の故事来歴に心をひかれるようになり、創立者のユベール・ブーブメリ氏との文通がはじまった。

ル・モンドを、新聞つくりの主体である記者集団が不動の主権をもつ、政治権力からも金銭の権力からも完全に独立した新聞に育てあげること。そのことに半生をかけて六九年に引退したブーブメリ氏は、今もオペラ座に近いイタリアン通りの社屋の五階に一室をもち、ル・モンドの顧問役をつとめている。

この四月はじめ、七年ぶりにル・モンド社でお会いした氏は、白髪の典雅な物腰にかわりはなく、八十四歳をこえた今も折々の山歩きを欠かさないと聞いた。

そのブーブメリ氏にとって、ル・モンドが昨年、後輩記者たちの甘い経営姿勢がたたって倒産寸前に追いこまれ、創立以来の伝統を破って、外部資本を受け入れざるをえなくなったのは、痛恨事だったにちがいない。愛読者の組織する「ル・モンド読者会」などの融資をあおぐほかなくなったのである。しかし、「それはル・モンド存続のため万やむをえず決断されたリスクであり、本来プレスは読

者からすら独立していなければならないと考える」と、かねてからの持論を確認する氏の語調には、いささかの衰えも感じられなかった。

反権力としてのプレス

そして、ブーブメリ氏はつぎのように前置きをして、二つの思い出を語ってくれた。「ジャーナリストが権力の誘惑に屈しないための公式といったものは存在しないが、記者がジャーナリズムというものをどう考えているか、どう意味づけているかが、彼の態度を左右することは確実だ。プレスもまた一つの権力であることは言うまでもないが、私はそれは権力の外に立つ権力、反権力（コントル・プーボワール）でなければならないと考えている。一部は私の回想録〔『統治の十一年』、一九七四年〕にも記したのだが、権力と反権力の関係を物語る、一つは悲劇的、一つは笑いをそそるエピソードを聞いてほしい……」。

前者は第二次大戦前夜の三八年二月の出来事である。当時ル・タン紙のプラハ特派員をしていてヒトラーの中欧侵略遠からずと予感したブーブメリ氏は、一時帰国してショータン首相やダラディエ国防相に会い、同盟国チェコスロバキアの防衛に臨むフランスの決意のほどをたしかめて回った。その結果彼が見出したのは、「両国は同盟国であり、双方の参謀本部は密接に連絡をとっている」と、繰り返すフランス政府首脳の主張は口さきだけのもので、真剣にチェコを守ろうという気概は皆無にひとしい、という現実だった。

プラハに帰任したブーブメリ氏が、ベネシュ大統領に実情を伝えたとき、ベネシュは激怒した。それでも君はフランス市民と言えるのか。自分はフランス人を熟知しており、フランス人に限って約束を破ることなどありえない、と言うのである。その秋、フランスがイギリスと歩調をあわせて、チェコを見殺しにしたことはよく知られている。

ドゴール将軍との応酬

今一つは、五八年九月にドゴール大統領と会った際のやりとりである。ブーブメリ時代のル・モンドは、ル・モンドの事実上の生みの親であるドゴール将軍に対しても、一切批判を手びかえることはしなかった。直接圧力を加えることそなかったものの、不満を抑え切れずにいた将軍は、開口一番、皮肉たっぷりに述べた。

――私もル・モンドを読んでいるが、あなたは大変な事情通とみえて、じつに面白い。

ブーブメリ氏は答えた。

「それほど興味あるよみものを提供できているとは思いませんが、もし面白味を感じてくださっているとすれば、フランスの国王たちが道化を抱えていたことを想起していただきたい。道化は面白がらせることを通じて、ときに廷臣の言えないことを言い、役に立っていたはずです」

将軍はしばらく沈黙していたが、相手の言わんとする所を完全に理解したのは明らかだった。

ついでブーブメリ氏がアルジェリア問題にふれ、「あなたを怒らせたくはないが、他ならぬあなたの幕僚のなかにも服従していないものがいることは承知しておかれるべきでしょう」と述べたところ、将軍は芝居がかった口調でつぎのように応酬し、ブーブメリ氏に一矢をむくいた。

――服従する？　人が服従するだって？　私がいい例だ。一体私は何に服従したことがあろう？

ブーブメリ氏の言うとおり、そこでは権力と反権力がそれぞれの役割をみごとに演じ切っていた。それは、権力者が暴君でも教条主義者でもなく、一方道化を演じる側でも、身に降りかかる結果はそっくり受け入れる覚悟ができているという二つの条件がそろって、はじめて可能になる場面であったと言えるだろう。

すずき　はくしん氏略歴　昭和九年神戸市出身。東京大学大学院国際関係修士課程修了。三十四年NHK入局。北九州放送局、外信部記者を務める。その間アフリカ移動特派員（三十八年）、サイゴン特派員（三十九～四十年）。その後「日本の条件」「平和の模索」などの番組制作にも参加、五十七年退局。現在、桃山学院大学助教授。

ワーキングプレス

逆転　同日選

"二つの風"にのった総理

小田隆裕

「永田町の常識は世間の非常識、世間の常識は永田町の非常識」と、どこかの新聞の投書欄にあった。政局が中曽根首相が強く望んだ臨時国会召集―衆院解散―衆参同日選挙に落ち着きそうになったいま、国民の目は鋭いと感じている。

「いままで、ダブル選挙、ダブル選挙とあおってきたのは衆院ではないか。それをお前たちだけで戦えと言う。こんな白けた空気の中でどう戦えるのか。こんな間違ったことを黙っていたら、参院の独自性はどこにあるのか。同日選挙をぜひ」と、参院自民党議員総会で高木正明氏(田中派)が涙を落とさんばかりに訴え、「参院の独自性のために同日選挙をなんて、どんな理屈か」と失笑を買ったのは五月十六日だった。言うまでもなく、衆院定数是正に関する坂田衆院議長調停で、三十日間の周知期間が設けられたことによって、中曽根首相の解散権が事実上、封じ込められたかにみえたからである。

高木氏ばかりではない。参院自民党の土屋幹事長は、この調停が出るや「弱った、弱った。これで参院選挙は投票率が上がらず勝てないよ」と、会う人ごとにグチをこぼしながら国会のジュータンをとび歩いていたものだ。もちろん、選挙は議員にとって生きるか死ぬかという問題だから、気持ちは分からないでもないが、あわてぶりを見せつけられると、胸の金バッジが哀れにみえる。

ドラマが反転したのは、それから四日後、金丸自民党幹事長が予定された党五役会議に欠席したことから始まった。

「金丸幹事長が行方不明だ。何かあるぞ」。中曽根首相が狙う同日選に対して党執行部として意思統一を図ろうというのが、この日の五役会議のはずだった。金丸氏の「行方不明」で当然、五役会議は流れた。それとともに「同日選封じ込め」へと向くはずだった流れは逆流した。姿を現した金丸氏が「政局安定のため早期解散やむなし」と発言したからである。

実は、この発言に至るまでには、すでに、同日選になるかどうかのカギを握っていた安倍外相が首相サイドに切り崩されていた、もう一つのドラマがあるのだが、すでに報道もされているので割愛する。

「同日選なし」の一幕と「逆転同日選へ」の二幕とは全く逆の話である。だが、相反する二つの劇を可能にしたのは、永田町に吹きまくっていた「解散風」という点では共通している。

まず、与野党の利害が対立しただけでなく、野党間、与党間でも減員対象区議員を抱えて難航していた調整を可能にしたのは、衆院解散が近く、抵抗していたらかえって不利になるという思惑だった。また、濃淡の違いはあれ、解散反対・阻止で足並みをそろえていた野党が「定数法案を成立させないと逆に中曽根首相に解散の口実を与える」という恐れを抱いていたことが、野党間の妥協と団結とに走らせた。調停に当たっていた坂田議長にとっては、解散風のご利益と言っていいかもしれない。

一幕目の「解散―同日選挙なし」のショックが、二幕目の「金丸裁定」が出たとたん「同日選挙へ」のうねりを作らせた。自民党の衆参両院議員の間を「同日選挙を求める」署名集めに歩いた鈴木宗男代議士(無派閥)らは、それぞれ同日選挙を想定してすでに走り回っていた組で、いわば「個利個略」で動いていた組だが、おつき合いにせよ、百三十人を越える両院議員が署名したことは、多かれ少なかれ同じ事情だったようだ。

だが、二幕目の逆転劇を可能にした裏には、もう一つ、自民党内に「世代交代」のうねりがあったことは無視できない。国民の支持率が高いとはいえ、党内第四の派閥の長である中曽根首相が、永田町の論理で動く「解散」をほぼ手にすることができたのは、安倍、竹下両氏があおる「世代交代の風」に乗ったからに他ならない。金丸発言の翌日、「同日選反対」を唱えた福田元首相の事務所に、若手議員の姿はまばらだった。ふつうなら多数の議員が押しかけなければならない時だ。長老の力はすでに落ちていた。福田氏が腰くだけにならざるを得ない。

二つの「風」に乗って、中曽根首相は「解散」のハンドルを手に入れた。ただ、歴代首相の中で、これほど解散風をあおり続け、強引に解散に持ち込んだ首相はいない。選挙で、国民が首相に対して、最後にどんな風を吹かすかは、また別の話である。(五月二十六日記)

(おだ　たかひろ　朝日新聞社政治部)

国営テレビが現地ルポ放映

江川　昌

ソ連のチェルノブイリで起きた、史上最悪の原発事故をめぐる報道では「情報化以前」のソ連と、未確認情報をどんどん投げ込んでくる「情報過多」の一部西側プレスの間に巻き込まれ、モスクワ特派員の多くが苦戦を強いられた。

事故の発表が遅れ、しかもその内容があまりにも簡単だったため、「ソ連は隠したがっている」と本能的に感じ取った各国モスクワ特派員は、ただちに猛烈な取材競争に突入した。だれもがチェルノブイリはもちろんのこと、そこから百三十キロ離れたキエフ市に電話を入れ手探りでの情報の収集に着手した。しかしこれはどちらかというと、肉体労働に近かった。まず、ソ連では市外通話の自動化が大幅に遅れており回線も少ない。しかもソ連の電話は一本一本が独立配線なので、やっと市役所などにつながっても、交換台を通じてあちこち回してもらうわけにはいかない。電話との格闘だった。

こうした〝奮闘〟の結果の一つが、UPI通信の「二千人以上死亡」という、ショッキングな報道だった。これが日本の新聞の朝刊最終版にでかでかと掲載され、事故の規模についての読者の先入観を決定的にした。チェルノブイリ原発の立地条件や付近の人口などを考えると、首をかしげたくなる数字でもあったが、この直後にソ連が発表した「死者は二人」という数字とのあまりの開きに、しばらく記者団の間で議論が続いた。

キエフに事故当時滞在していた外国人旅行者で、モスクワを通過する者も重要な取材源になった（キエフは事故後外国人特派員立ち入り禁止となっていた）。しかし観光目的の外国人の目には異常事態は観察されなかったようで、われわれの側の成果はあまりあがらなかった。後にキエフからモスクワに脱出してくるソ連市民が増えたが、モスクワの駅などでは警官が外国人特派員との接触を妨げた。

ソ連が情報を制限したこともあったかもしれないが、世界の大騒ぎをよそに、この間モスクワは全く静かだった。モスクワ滞在の邦人の中では、商社関係者や留学生の一部に一時的に動揺があったが、東京から招かれた原子力専門家の安全宣言で、それも収まった。

ソ連は「西側の誇大報道は意図的な反ソ行為」と批判している。しかしソ連側の初期の対応がより柔軟なものであったら、そのようなことも起こらなかったはずだ。しかし同時に欧米や日本の国民の間に普段からある反ソ感情が、科学的な理屈を抜きにして騒ぎを大きくしたことも否めないだろう。五月に入るとモスクワでも専門家による記者会見が何回かあり、「事故現場から三十キロ以遠は安全」と声明が行われたが、もとより確認のしようもなくそのまま送稿する以外になかった。こういう場合のソ連の言い分は掲載率があまりよくない。

今回の事故では思わぬ副産物もあった。国営テレビによる生々しい事故現場のルポである。これは国民の間で日ごとに高まる不安を鎮めるために、事故後二週間あたりから始められた。問題の原発を含めた事故現場と放射能封じ込めの作業の様子がリアルに写し出され、市民は連夜テレビの前にくぎ付けになった。ソ連ではこれまで考えられもしなかった光景である。皮肉なことだが、ゴルバチョフ書記長の唱える「情報の公開性」は、今回の悲劇的な事故で初めて試練と実践の場を得た。ソ連の体制も国民も、多くを学んだはずだ。

（えがわ　まさし　毎日新聞社モスクワ特派員）

キエフ市で放射能検査のため行列をつくる市民（ロイター＝プール写真）

企業の円高対策

ワーキングプレス

記者冥利の時代？

服部光訓

「アナログからデジタルへ」――電機業界を取材していると、耳にたんこぶができるほどに聞かされる言葉だ。石油ショックがアナログ的変化とすれば、急激な円高はデジタル的変化である。言葉を換えれば、石油ショックは戦術的対応で乗り切れたものの、円高は戦略的対応をなくしては乗り切れないのである。

日本電子機械工業会会長兼経団連副会長の佐波正一東芝会長の言葉を借りれば、量的対応ではなく、質的対応が問われているのだ。円高革命に対応できなくて、落ちこぼれていく企業が出るのは必至だろう。

円高メリットを生かそうと、輸出依存度が高い企業は海外製資材・部品の調達、海外生産に本腰を入れ始めた。その分国内生産は減る可能性が強く、いわゆる空洞化現象が起きる。そのしわよせは部品メーカーや下請けにいくだろう。

しかし、エクセレントカンパニーはしたたかだ。円高をテコに、いやそれを口実に経営体質を強くしたり、国際戦略を強化しようとさえしているのだ。

松下電器産業のトップが打ち明ける。「円高は産業、企業を高度化する絶好の機会である」。手をこまねいていても空洞化する。それなら、逆手をとって懸案の解決に利用というわけだ。

NICS（新興工業国・地域群）に太刀打ちできない製品の生産を円高を理由に打ち切ろうというわけだ。かねて検討していたものの、社内や下請けの抵抗で実現は難しかった。円高を錦の御旗に一気に成しとげようとしているかにさえ感じる。

日本経済新聞社は最近、輸出型大企業を対象とした「円高調査」を行ったが、回答率はほぼ百％で予想以上に高かった。自分の会社の円高対策を知ってもらいたいとの希望が多いことをうかがわせた。同時に円高には危機感があるものの、好機ととらえていることを示している。

私個人の反省を交えて思うのは新聞記者の発想よりも経営者の発想が大胆で、しかもち密だという点だ。円高に絡む企業行動を取材するたびに、そんな当たり前のことを改めて思いしらされる。富士通の山本卓真社長は「記者冥利に尽きる時代」と経団連記者クラブのメンバーに話すが、それを実践するのには相当の努力がいると思うこの頃でもある。

しかし、円高が引き金となって何が起きてもおかしくないのも事実である。

現に、三洋電機と東京三洋電機との合併、富士重工といすゞの共同アメリカ進出など、円安時代には想像さえできなかったケースがうまれている。

江戸時代に最大の産業だった、なたね油産業は明治維新後に崩壊した。明治維新は今風に言えば、デジタル的変化に見舞われたと言える。円高時代に生き残れない産業はなにか――。産業自体は残るにしても、姿を消す企業や産地は――。緊張する時間が続きそうだ。

産業の再編や生き残りのための提携は、海外企業を巻き込んで起きるだろう。日本企業もいやおうなしに国際化せざるを得ないだろう。

国際化と言えば、日本製品が最も国際性を持っているが、企業や企業人の国際化は製品に比べると相当遅れている。人の生活、文化の国際化はもっと遅れている。我が日本が国際世界で生きれるように変身する引き金に円高がなるのを願わざるを得ない。

（はっとり　みつのり　日本経済新聞社産業第四部）

米国での小型車生産の提携を発表する田島富士重工社長（右）と飛山いすゞ社長（5月19日）

スタジオ訪問

経済ホットチャンネル

経済の時代へのパイプ役に

「経済ブーム」という言葉をよく耳にする。その気になって見ると、書店に積まれた本の中や、新聞、週刊誌などの記事の中に、経済関係のものが確かにたくさんある。朝日、読売、日経が始めた〝経済特集版〟も好評のようだ。本当に経済の時代が来たのだろうか。

テレビメディアとして〝経済・情報番組〟で独自の路線を打ち出しているテレビ東京が、昨年十月にスタートさせた「経済ホットチャンネル」を五月十九日訪問した。月曜の午後十時から三十分、司会役の池田正義さん（日本経済新聞編集委員）とゲストの話を中心に、番組が展開される。

昨年十二月に完成した虎の門の新社屋は、廊下もエレベーターも三階の報道局も、すべて明るく真新しい。報道局には本スタジオの他にサブスタジオがある。これらのスタジオから、朝の天気予報から夜の最終ニュースまで、一日に十本以上の番組が送られている。

プロデューサーの渥美隆雄さんは、今年の四月からこの番組を担当している。スタート当初は、ゲストに芸能人なども迎え、分かりやすい軟派的なテーマで視聴率獲得を狙った。その結果、平均五%前後を得るようになり、「経済番組としての一定の評価は得たと考え、四月からは正確なデータにより重点を置くような番組作りを進めています」と渥美さん。「やや固くなったかとは思いますが、ホーム財テクから国際経済まで、幅広いテーマ設定は変わりません」。

テーマは、月に一度の企画会議で決める。その場でゲストも決まる。番組は三人のディレクターが交替で準備、制作に当たっている。放送日の午後四時半から旧社屋のテレビ東京スタジオセンターで収録、VTRを持ち帰って編集する。新社屋のスタジオを使わないのは「番組の規模が中途半端なため」だそうだ。新しいスタジオでの収録風景が見られないのは残念だが、話を聞いた後、渥美さんと芝公園のスタジオセンターへ向かった。

スタジオに入ると、ちょうどリハーサルが始まるところ。司会の池田さんとアシスタントの早夏えり子さんが、冒頭の数分間だけを試し、リハーサル終了。この後、ゲストの竹村健一さんがセットにつき、本番まで池田さんと最終的な打ち合わせをする。「ゲストによっては、きちんとリハーサルをしますが、竹村さんの場合は自由に話してもらった方がいいので、リハーサルはやりません」と渥美さん。もらった台本にも「竹村――（以下司会者とのフリートークで）」としか書かれていない。

VTR収録とはいえ、本番の緊張感は生放送と変わらない。あっという間に三十分が過ぎた。収録後、池田さんに話をきいた。

池田さんは、この番組スタート時から司会を務めているが、他にも週二回、同局の「ビジネスマンニュース」（午前六時三十分）も担当している。「今は新聞よりもこっちに使う時間の方が多いですよ」と池田さん。「経済番組というのは、専門的なものか、ぐっとくだけたものかどちらかだったんです。この番組は、その中間を目指しているんです」。複雑な経済問題をどうすれば一般の人にも分かるように解説できるか。経済の大きな流れを、どれだけ身近かなものとして理解してもらえるか。池田さんが毎週頭をめぐらす点だ。

一人で解説すると、とかく講義調になりやすい。それを避けるために、ゲストとのやりとりを重視していると言う。「自分で言いたいことを、できるだけゲストに言わせるようにしています」。

テレビの特性を生かすことも大切だ。言うまでもなく、新聞との決定的な違いは「映像」にある。それを実感したのがマル優問題だった。「レポーターを銀行に行かせて、窓口でマル優の限度申請用紙に記入させました。言葉で説明するよりずっと分かりやすかったと思います」。

「ところで、経済の時代だよくと言われますが、本当でしょうか」ときいてみた。答えはすぐに返ってきた。

「そうは思いません。やっとその入口に立ったところです。個人が経済のメカニズムをじっくり考え、理解するのが経済の時代ですが、それには歴史的な蓄積が必要です。あと五年はかかるでしょう。この番組がそのパイプ役になれればと思います」

（河野　聡）

「今週の焦点」のゲスト青山さん（野村総研）とコメントの確認をする池田さん（右から2人目）

クラブゲスト

ベッチーノ・クラクシ　イタリア首相

ただいま政権担当最長記録を更新中。これまでの〝長寿記録〟は第三次モロ内閣の八三三日。一九八三年八月四日に戦後初の社会党首班内閣として登場、今夏四年目へ。戦後歴代内閣の平均寿命が十か月半くらいだそうだから大記録だ。キリスト教民主党（16）、社会党（6）、共和党（3）、社民党（3）、自由党（2）の五党連立中道左派内閣。昨年だけでも賃金抑制策での国民投票、リラ急落、客船アキレ・ラウロ号乗っ取り事件と数次〝政治危機〟に見舞われたが、思い切りのよさと協調性で乗り切る。

会見では、サミットを前にイタリアの出方をうかがう質問が次々と。対リビア経済制裁には？　G5は使命終了か？　原子炉事故での情報公開の問題には？――しかし、肝心の公式通訳の日本語がまったくの落題で、首相の力量が十分〝翻訳〟されず、無残な結果になった。なお、首相はこの会見で、皇太子ご夫妻の訪伊を正式に要請したことを明らかにした。〔五月二日（金）記者会見　司会　常盤恭一副理事長　通訳　カルロ・キエーサ　G・レッテル　出席　二一一人〕

ブライアン・マルルーニ　カナダ首相

伊首相の会見で通訳に頭を痛めた後だけに、近藤みえ子さん（駐日公使夫人）の英↔日、仏↔日の二刀流の通訳ぶりがとりわけ光った。英語と仏語の両方が公用語で、首相はケベック州選出。英語でスピーチをしていたと思ったら、途中フランス語が入り、また英語へ。が、いずれも見事に日本語へ訳す。一方、これも大使館で準備した別の通訳が、11階通訳ブースから同行記者のため、英↔仏の同通サービス。日、英、仏の三か国語が入りまじる会見もスムーズに行われた。

首相はサミットで新設のG7について、「G5との関係はまだ分からない。G7の運営方法がはっきりするのは来年の今頃になろう」としながらも、G7の会合の頻度が増すにつれ、最終的にG5が不要になるとの見通しを示した。また、G7新設のため、約八か月前から日、米、仏の三首脳に働きかけていた事実も明らかにした。〔五月八日（木）　記者会見　司会　細谷洋一理事　通訳　近藤みえ子　出席　一七三人〕

モシェ・アレンス　イスラエル無任所相

一九二五年リトアニア生まれ（現在ソ連に併合）。三九年に米国移住、MIT卒。五七年からイスラエル国民に。駐米大使、国防相を歴任、右派リクードの実力者。

「イスラエルは国際テロリズムに対してつねに最前線で戦っている。サミットで各国首脳がリビア名指しの声明を採択したのは極めて重要」〔五月一三日（火）　記者会見　司会　石丸和人企画委員　通訳　吉国ゆり　出席　四〇人〕

リー・シエンロン　シンガポール通産相代行

「シンガポール政界のニューリーダーです。わが国のニューリーダーと決定的に違うのは三十四歳という若さです」と司会者。ケンブリッジ大で数学とコンピューターを学び、ハーバード大で行政学を専攻、その後軍生活に入りナンバー2の参謀次長で退役、八四年政界へ。今年一月から現職。昨年初のマイナス成長を経験した同国の経済再建策をまとめた政府諮問委員会の座長も務めた。

「（後継者問題について）　シンガポールでは能力のないものはポストにつけない。もしそういう人物が首相の関係者なら、首相自身の地位も危くなる。しかしまた親子だということで資格を奪うべきでもない」〔五月一三日（火）　記者会見　司会　有賀忍企画委員　通訳　村田恵子　出席　五七人〕

ロバート・J・L・ホーク　オーストラリア首相

「クラブでの会見は二度目です。スポーツマンでして、クリケット、テニスに加え、最近はゴルフも始められたようです。しかし、ハンディはコンフィデンシ

クラブゲスト

ャルだそうです。かつては大変な酒豪だったそうですが、首相になられてからはひかえておられるとか…」。この司会者の紹介に「こんな遠くにまで来て、過去を暴露されるとは思わなかった」と大笑（オックスフォード在学中ビール飲み大会で優勝の経験あり）。

事実上機能停止のアンザス体制について、米国がNZに対する条約上の義務履行をやめても、条約はそのままの形で存続させ、将来NZが態度を変更した場合に備えたいとの考えを示した（オーストラリアの核不拡散法案には核艦船の入港拒否条項なし）。写真は会見前サッチャー、ミッテランと並ぶご自身の写真の前で撮ったもの。〔五月一六日（金）　記者会見　司会　深川誠理事　通訳　米倉淑子　出席九五人〕

藤岡真佐夫　アジア開発銀行総裁

ニュースを携えてきたゲストというのはやはり精彩を放つ。先の第十九回総会で「中台・同時加盟」が実現、その中国への訪問からの帰途、クラブでの昼食会となった。

八三年七月成田空港で買った新聞のベタ記事がすべての始まりだった。それは「台湾が名称を中国―台湾に変えるなら残留してもよい」との鄧小平発言だった。その後三年近い極秘交渉のあらましを紹介した。最大の問題は名称と国旗だったが、最終的に名称は「中国台北」（Taipei, China）で落着。またインドへの初融資に続き、中国への融資の可能性も示唆した。ほかにもアキノ政権への緊急融資や新政権の将来など話題は尽きない。〔五月一九日（月）　昼食会　司会　高野洋企画委員　出席　四八人〕

井上　ひさし氏

テーマは「新聞文章、放送ことば、日本語」。小学一年でルビつきの朝、毎、読三紙併読、それで足りずに近所のおじいさんのところへ時事新報を読みに行った。そして現在は半日かけて八紙に目を通す〝ありがたい〟お客さま。

「新聞記者になりたかったんです」「戦争中の新聞も一面はタテマエばかりだが、注意して読めば真実を伝えようとする記者の苦心が分かる」「パターン化した報道文も読者は約束事として読むので……」「（国鉄資産評価）素人がすぐ気づくことを新聞、テレビはなぜとりあげないのでしょう。我々が騒いだ後、新聞が記事にするとデータもしっかりして迫力のあるものが出てくるのに」「やさしくどれくらい深いことを表現できるかに尽きる」「いま受け手の質はよくないが、新聞もテレビも受け手にこびないでください」。記念署名「暮しは低く志は高く」。

最後に大喝采を呼んだ新井理事長のパターン新聞文章術によるお礼のことばは、講演記録としての発行の際のおたのしみ。〔五月二六日（月）　総会記念講演会　出席一四〇人〕

井上　靖氏　張　炳恵氏　楊　覚勇氏

「ホノルルでのお別れの時、この真珠のイヤリングと『風濤』をいただきました。読むうちに真珠のように心に涙がにじんできました。民族の悲劇とそれによせる先生の人間愛に多くを教えられました」

『風濤』の韓国語訳出版を機に、作者の井上氏、訳者の張さん、そしてよき協力者であったご主人の楊さんの三人を囲み懇談した。作品は元寇の役を、日本侵略の先兵役を強いられた高麗の立場から描いたもの。「東西センターでの講義のため、私たち（夫人も同席）がハワイ滞在中、お二人に大変お世話になりました。そのうえ、今度、五年八か月を費やして、私の本を翻訳していただきありがたく思っています」。〔五月二七日（火）　懇談会　司会　有馬真喜子企画委員　出席　五一人〕

S・M・マシェル　モザンビーク大統領

演説好きで三時間でも四時間でもしゃべり、聴衆が疲れたとみると、パリトンで歌いだすという。七〇年モンドラネ初代議長が暗殺された後、解放戦線の二代目議長としてポルトガルからの独立闘争を率い、七五年初代大統領に。

「ハダの色で差別され、虐待されているところから来た。五世紀にわたり植民地だった。自由となるため武器を持って戦わねばならなかった。飢餓と南アのアパルトヘイトと闘うモザンビークの本当のイメージを知ってもらうため、私はここに立っている」と弁説はとまらない。が、表情は陽性だ。最後は、随員20人余りを壇上に上げて紹介し、「これがピストルもつくれない我々の武器だ。白いのも黒いのもいる」。〔五月二八日（水）　記者会見　司会　石丸和人企画委員　通訳　安養寺シルビア　出席　四九人〕

プロフィール

五月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方がたです。

第134回企画委員会（5・7　宴会場）

司会をした委員による行事報告の後、六月のクラブゲストについて意見を交換。二階堂進自民党副総裁、神野藤重中靖国神社権宮司らを招くよう折衝することにした。

出席　藤村委員長。浅井、山岸、広瀬、井上、石丸、高野、水野、白井、武藤、木村、中川、村野、ヒルシャーの各委員。

第71回会報委員会（5・12　小会議室）

五月号について意見交換の後、六月号の編集方針を協議した。

出席　深川委員長。林、井出、安延の各委員。

第105回会員資格委員会（5・14　8階会議室）

六月一日付の入退会を審議し、理事会へ答申した。内規の見直し作業終了。

出席　渡辺委員長。中川、小池、加藤、樋口、林、玉井、青木、埜邑の各委員。

第27回施設運営委員会（5・21　小会議室）

記者会見室、事務局の拡張、座談会室の確保などクラブの基本機能充実のため、八階に約八〇坪を借り増し、現在借用中の八階会議室二〇坪を返す案を、総務委員会へ報告することにした。

出席　原委員長。佐川、河崎、和田、宮地、山崎、黒木の各委員。

第37回総務委員会（5・26　小会議室）

第27回施設運営委員会のクラブ機能の拡充強化案について、財政上の見地から検討、協議した。会員の入会審査方針に関する渡辺委員長報告を了承。

出席　細谷、渡辺(恒)、原、吉原、山田、泉の各委員。新井理事長、中江、常盤副理事長。

第107回理事会（5・26　宴会場）

現在八階に借りている会議室（約二〇坪）を返し、同フロアに約八〇坪を八月一日から借り増すことを決定した。関連して原施設運営委員長が①会見室の拡張②応接室の賓客専用化③事務局拡大④会議室、配ぜんスペースの確保⑥ワーキングブース増設などクラブの基本機能充足に重点を置いて、使用方法とデザインを考えたいと報告、これを了承した。

五月、六月の会員資格委員会で検討した、新入会審査方針について渡辺委員長から報告、これを了承した。

出席　新井理事長、中江、常盤副理事長。渡辺(恒)、細谷、原、米、池上、安藤、吉原、木村、山田、泉、中根の各理事。白鳥監事。

▼ホノルルのイースト・ウエスト・センターで、国際ジャーナリストのためのジェファーソン・フェローシップに参加。本年度は、三月九日からの八週間、米人記者六名、アジア太平洋地域の記者六名で、研究所でのセミナーのほか、アジア記者は米本土を、アメリカ人記者は日本、中国などアジア各国を取材した。

（朝日放送　岡村黎明）

▼中国の対外文化協会の招待で訪中。北京で国際情勢の講演のあと、成都、重慶と回りますが、坂田にとっては、上海は四十八年ぶりのセンチメンタル・ジャーニーとなります。

（坂田　二郎・米谷健一郎）

▼この度、フリーになったので、二度の九州勤務での〝取材〟を生かし、月二回の「古代・未来塾」を始めた。会場は主に港区勤労福祉会館、会費はその都度五百円。福岡市で七年間続けたヤマタイ国研究会の東方進出、五年は続けたい。

夢は全国的な日中関係史研究会の組織化。北京ではすでに中日関係史研究会がつくられている。連絡先＝東京都港区三田二―八―二〇―八〇五　電話（四五五）〇三八〇

（壱岐　一郎）

▼会報（二月十日号）の『とっておきの話』欄に拙稿「準備預金制度の発動」を掲載させていただいた。お手紙を添えてその会報を池田満枝元総理未亡人にお送りしたところ、早速に返信が届いた。内容の一部を引き写させていただく。

〔原文のまま〕「……その昔の池田勇人をいろいろ憶い出して頂いての記事をお送り頂き胸のつまる思いで拝見致しました　亡くなって二十年もたちますので次第に忘れられてゆく折からして　当時を思い出して下さる方がある事は誠に有難度いことでございます……」

（稲田正義）

会合紹介

8日▽井出一太郎先生を激励、慰労する会（朝日　竹内謙会員）　▽新聞広告のマスコットマーク愛称選考会―応募総数三八、四九二通の中から「しんちゃん」に決定（協会　権田萬治会員）　9日▽東京新聞政治部OB会（中日　佐藤雄一会員）　▽航空を語る会―航空専門記者OBと日航OB（日航　渡会信二会員）　▽シリーズふるさと対談「スポーツと健康」木原光知子さんと向井文部省スポーツ課長補佐（山陽　藤岡進会員）　10日▽池田千城君を偲ぶ会（朝日　有馬純達会員）　▽都市問題研究会（読売　本吉庸浩会員）　12日▽日墨協会　マスコミ懇談会―メキシコ邦字紙「にちぼく」代表荻野正蔵氏ほかと各社外報部記者（伊藤一男会員）　13日▽第26回紙面審査全国懇談会懇親会（協会　村上孝止会員）　▽日米野球打ち合わせ（スポニチ　荒井良徳会員）　14日▽東都会―都新聞、東京新聞出身者の集い（宮村文雄会員）　16日▽放送問題総合研究会（佐田一彦会員）　▽在京九社編集局長会（協会　宝子山幸充会員）　17日▽農政ジャーナリストの会総会、懇親会（山地進会員）　19日▽泉英毅氏を激励する会（朝日放　長谷部光郎会員）　▽ゲアリ・ピアース西オーストラリア開発公社理事記者会見（豪大使館　武田吉朗会員）　▽テレビ・プロ野球担当者会議（TBS　小松鎌平会員）　21日▽座談会「沖縄の人権と課題」北山六郎日弁連会長、金城睦日弁連沖縄連合会会長、中川潤弁護士ほか（沖タイ　由井晶子会員）　22日▽ジョン・ケイン豪ビクトリア州首相記者会見、レセプション（豪大使館　ジェフ・ヒスコック会員）　▽マカッサル会―同盟通信の南方勤務者の集い（内田啓明会員）　23日▽時事OBクラブ総会（時事　佐藤達郎会員）　24日▽高句麗文化展記念シンポジウム・パーティー（読売　谷崎龍平会員）　28日▽シリーズ国連大使は語る「日本―国連―世界」第一回加瀬俊一氏（国連広報センター　中村恭一会員）

「会員がクラブ施設を利用して行った主な会合」です。五月の総回数は一一二でした。

「しんちゃん」―新聞広告のマスコットマークの愛称です。

○囲碁の会●

五月の例会は二十四日、参加十八人、総対局数三十五局。体調回復途上の吉沢六段、いまいちばんつよい伊藤六段の実力者二人と、三か月ぶり登場のこれまた実力派西崎四段が優秀な成績をあげた。

次回は六月二十一日（土）午後一時から記者会見室で夏季大会です。世界アマ選手権大会で採用されているスイス方式で競技すべく、世話人は〝泥縄式〟で研究中です。初めての方も遠慮なくどうぞ。参加費は二千円。優勝者から最下位まで賞品もれなし。ウイスキー飲み放題。楽しんでみませんか。

写真回廊

腕を垂らした女性

写真　平　博之（読売新聞社写真部）

「……小町娘的な気分がただよっているような気がする」うんぬんと、村松友視さんが彼女の目くばりの柔らかさについて、「日経」に書いている。今月の「写真回廊」の候補作（すべてダイアナ妃）をながめた時、私は女性を見る村松さんのたしかな目を基準に、迷わずこの一枚を選んだ。

ロンドンへ帰る飛行機の入り口で頭をゴツンとしそうになり、顔を見合わす二人の表情が生きている。皇太子は後ろ向きでなければいけない。

ケネディは、大統領になっても「ジャクリーンの夫です」と自己紹介して、聴衆を喜ばせたが、チャールズ皇太子にもそんなそぶりが見える。男女が心底惚れあって、しかも英国の国王と皇后になれることをこのカップルが立証したら、さきごろ世を去ったシンプソン夫人も拍手をするだろう。

かつて、人の上に人を作ったのが王室だった。それがいま、国民のために善意のセールスマンになり、地球上を東奔西走する。過密スケジュールで若い妻が目まいを起こすほどつとめている。

この写真は二人だけの世界をかい間見せた。その上、珍らしく、ダイアナ妃の二の腕の先から指先まで見せてくれている。女性は心を許した相手には腕を垂れるものらしい。

（仲　晃）

レストランのナンバースタンドに会員証を

卓上のナンバースタンドに、会員証をはさめるように工夫しました。非会員の食堂利用防止のための措置です。テーブルにつきましたら、必ず会員証を置くよう、ご協力ください。

ゲスト・カード

日本新聞協会第9回ASEAN記者研修計画参加者（6・9〜7・18）　オキ・ルキト（インドネシア・メモランダム紙）　ジャウマット・ドゥルハジャ（同ハリアン・ベリタ・ジャヤカルタ紙）　バンバン・サドノ（同・スアラ・ムルデカ紙）　チャン・セイ・イエット（マレーシア・馬来亜通報）　ジョージ・チャン・ハン・レオン（同・ニュー・ストレーツ・タイムズ紙）　ヤップ・ゲット・チョイ（同・星洲日報）　マイクル・D・マラシガン（フィリピン・ビジネス・デイ紙）　カルロス・ガルシア・ヒダルゴ（同・パハヤガング・マラヤ紙）　エリノア・モレノ・トリンチェラ（同・ディスパッチ紙）　イェオ・スウィー・ホン（シンガポール・聯合早報）　クン・ユー・モン（同・ストレーツ・タイムズ紙）　デワニ・ピンテ・アバス（同・ベリタ・ハリアン紙）　ブンチャイ・マハータナンチャイ（タイ・ネーウ・ナー紙）　トリースコン・スコンタウィト（同・タイ・ラット紙）　スポーペ・ポーンシーサック（同・バンコク・ワールド紙）

日本IBM大和研究所見学会

日本におけるIBMの研究中枢。昨年七月完成。それまで各所に分散していた製品開発部門が、ここに集中。一、五〇〇人（外人五〇人）の研究員がワークステーション、漢字プリンター、小型ディスク、ディスプレイ等の研究開発に当たる（写真）。石田清二取締役研究所長のブリーフィングの後、所内を見学した。圧巻は一人一台ずつのワークステーション（パソコン、ワープロ、端末兼用）。同社の各国研究所と結ばれており、研究情報はもちろん、全世界の研究員の電話リストまで引き出し可。地上六階地下一階建て、自然光を取り入れた人間工学設計と情報厳守の電子ロックの共存。（5月28日　参加四七人）

クラブ訪問者

5／27　ルイス・J・マキアベロ　ペルー大使

会員の著書（ご恵贈いただきました）

フェミニズムとオーストラリア　加藤愛子訳

寄贈書

昭和の戦争　1・9　講談社
話す英語　書く英語　朝日イブニングニュース社
英字新聞　イディオム倍増法　〃
舞台・ベルリン　〃　〃
英語引用句辞典　〃

TANAKA KAKUEI: GODFATHER OF JAPAN　藤原弘達著作刊行会
OUTPUT　総合研究開発機構
1986 ACCJ　在日米国商工会議所
世界のラジオとテレビジョン　日本放送協会
State of the World　ワールドウォッチ・インスティテュート

展覧会の招待券　朝日新聞社から「ニコ・ピロスマニ展」、共同通信社から「善光寺展」の招待券をご恵贈いただきました。お礼申しあげます。

六月一日現在の会員状況　法人会員　一四六社　基本会員　六三二人　個人会員　一、三〇三人　法人・個人賛助会員　七七社　二二九人　特別賛助会員　七八人　名誉会員　一六人　計　二二三社　二、二五八人

六月の行事（5日現在）

14日（土）午後2時30分〜3時30分　**バーナード・ラウン核戦争防止国際医師会議会長**記者会見
19日（木）午後1時〜2時30分　**アグネス・チャンさんを囲む会**
23日（月）正午〜午後2時　**杉浦喬也国鉄総裁**昼食会

会報委員長＝深川　誠
委員＝林　利隆　井出新六　斎藤吉史　安延久夫
連絡＝長谷川　河野（事務局）五〇三—二七二一